

# 長崎におけるカトリック教会巡礼とツーリズム

木村 勝彦

(長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科)

## 要約

近年、長崎のカトリック教会群が観光資源として脚光を浴び、観光商品化されるという現象が生じている。本稿では、長崎における教会巡礼ツアーという事例を通して、宗教的聖地に及ぼされているツーリズムの影響と、それに対する聖地の側の応答という問題について考察しようとするものである。

## キーワード

長崎、カトリック教会群、巡礼、聖地、世界遺産、ホストとゲスト

## はじめに

長崎県下には、1550年のフランシスコ・ザビエル (Francisco Xavier) による平戸へのキリスト教布教の開始から450有余年に及ぶ歴史を背景として、137のカトリック教会が存在している。そして近年、そうしたカトリック教会群はそこに集う信者たちが好むと好まざるとに関わらず、ツーリズムと直面せざるを得ない状況に立ち至っている。祈りの場である教会が観光資源として地域の観光戦略のなかに組み込まれ、キリスト教信仰の有無を問わず観光客を対象として、いわば「教会の観光商品化」が積極的に行われているのである。そうした観光戦略は一定の効果を挙げ、県内各地の教会を訪れる観光客の数は堅調な伸びをみせている。それと同時に、聖地としての教会の聖性に惹きつけられ、何らかの宗教的動機によって教会を訪ねるという教会巡礼者も相当数に上り、「教会巡礼」と銘打った旅行商品が数多く企画・販売されている。ここで巡礼 (pilgrimage) とツーリズムとをただちに同一視することはできないが、V. スミスも指摘するように、巡礼者と観光客とは共に旅行者としては「同じインフラを共有する」<sup>1)</sup> のであって、両者をまったく別のものとみることもできない。実際、宗教的な動機を

もつ巡礼旅行といえども、それを企画・催行するのは県内外の旅行会社であるし、個人的に教会を巡る旅行者の場合も、交通・宿泊・飲食などの観光事業に関わる面では観光客として扱われざるを得ないのである。それがどのような動機に基づく、どのような形態の旅行であっても、カトリック教会群を訪れる旅行者の増加という現象は、ツーリズムの問題にほかならない。したがって、それを肯定的にみるにせよ否定的にみるにせよ、今日の教会のあり方に決定的な影響を与えているのがツーリズムであることは紛れもない事実である。本稿は、宗教的聖地に関わるツーリズムの影響という近年ことに顕著になってきた問題について、長崎におけるカトリック教会巡礼ツアーという事例を通して考察しようとするものである。

## 長崎県におけるカトリック信仰と教会の意義

ここでまず、長崎県におけるカトリック信仰のおおまかな現況を確認すると共に、信仰の拠点として信者自らが建設し、生活の中心としてきた教会の意義について考えてみたい。日本におけるカトリック教会は16の教区からなり、信者数は2004年末で約45万人である。そのうち長崎県全域を範囲とする長崎教区の信者数は6万

7千人で、これは東京教区の9万2千人に次いで全国2位の多さであり、大阪教区の5万5千人や横浜教区の5万4千人を上回っている。東京、大阪、横浜の3教区はいずれも大都市を含む人口稠密地区であって、逆に長崎県が深刻な過疎の問題を抱えていることを考慮するならば、長崎教区における信者数の多さは際立っていると言えることができよう。実際に教区内の全人口に占めるカトリック信者率をみるならば、長崎教区の場合は4.43%であるのに対して、大阪教区では0.36%、横浜教区では0.35%であり、東京教区でさえ0.51%に過ぎない。長崎県におけるカトリックの信者率は日本全体のなかで群を抜いて高く、そのことは教会数の多さにも反映されている。横浜教区が99、大阪教区が89、東京教区が81の教会を有するのに比して、70の小教区から成る長崎教区における教会数は先に述べたように137で、他の教区を圧している。ただし、137の教会のなかには、規模の小さな聖堂で定期的に司祭が巡回してくるだけの巡回教会63が含まれているが、そのことはまた人口の極めて少ない山間・海浜の集落にも教会が分布している状況を示しており、カトリック信仰が長崎県の全域に広がっていることを立証するものだと言うこともできる<sup>2)</sup>。いずれにせよ、信者数からしても教会数からしても、長崎県は日本のカトリック教会にとっては格別の場所なのであり、カトリック信仰の拠点となっているのである。そして、そのことは中世末・近世初頭以来の長崎におけるキリスト教の際立った歴史に由来しているのであって、この歴史こそが長崎の教会群の聖性を支える物語として、巡礼を成立せしめる宗教的根拠となっている。この歴史を抜きにして、長崎における教会巡礼とツーリズムの関係を論じることもできない。

ここではそうした長崎におけるキリスト教の歴史を詳細に論じることはできないが、その物語を要約するならば、輝かしい「布教」、悲惨な「弾圧・殉教」、奇跡的な「信仰堅持(潜伏)」、そして輝かしい「復帰」ということにな

ろう。中世末・近世初頭においてキリスト教の日本布教の中心地であった長崎地方では、ザビエルの後継者であるコスメ・デ・トルレス(Cosme de Torres)神父やガスパル・ヴィレラ(Gaspar Vilela)神父、ルイス・デ・アルメイダ(Luis de Almeida)修道士、さらにはルイス・フロイス(Luis Frois)神父などの精力的な布教活動によって各地に拠点を増やし、教勢を拡大させていった。日本巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノ(Alessandro Valignano)神父に率いられた4名の天正遣欧少年使節が長崎の港を出発した1582年頃には、肥前・肥後のキリスト教信者は11万2千名に達していたと言われる。そのため、県内各地には宣教師たちによる伝道活動にゆかりの場所や、かつて教会、修道院、セミナリオ(神学校)、コレジオ(宣教師養成のための高等教育機関)などが建設されていた場所が数多く存在する。

さらにまた、そうした輝かしい「布教」の歴史とは逆に、豊臣秀吉によるバテレン追放令(1587年)や二十六聖人殉教(1597年)、徳川幕府による禁教令(1614年)や元和の大殉教(1622年)から明治初期に至るまで断続的に続き、日本キリスト教史を世界のキリスト教史のなかでも際立ったものとしているキリシタン弾圧と殉教との悲惨な歴史を証言し、記念する場所も多いのである。そうした場所のうちには、迫害・弾圧のなかでも潜伏して信仰を堅持し続けた信者たち(潜伏キリシタン)によって密かに粘り強く崇敬を受けることにより、自ずと聖地としての意味を付与されてきたものもある。あるいはまた、1865年に大浦天主堂でプチジャン(Bernard Thadée Petitjean)神父により浦上村の潜伏信者たちの信仰が確認(信徒発見)されて以来、県内各地の多くの潜伏信者がカトリックへの復帰を果たしていく中で、弾圧と殉教に関わる場所が奇跡的な信仰堅持の証として認知され、カトリックの側から聖地へと昇格させられたものもある。

今日では、それらの場所の多くは歴史的遺跡

として整備されると共に、「布教」「殉教」「信仰堅持」「復帰」という「聖なる歴史」に関わる聖地としてカトリック信者たちの信仰の対象となっているのである。しかし、長崎のキリスト教聖地を意味づけるもう一つの物語として、「鎮魂・慰霊」という要素を看過することはできない。弾圧・殉教にまつわる場所は、「信仰の奇跡」としての殉教の出来事の顕彰だけではなく、そこで命を落とした人々への鎮魂・慰霊をも目的としている。さらに、殉教者の霊を慰めるということは、潜伏キリシタンを先祖とするほとんどのカトリック信者にとって、殉教することのできなかつた、あるいは「真のキリスト教信仰」に出会うことなく死んでいった先祖たちへの慰霊をも、隠された目的としているように思われる。

こうした「聖なる歴史」と「鎮魂・慰霊」の物語は、長崎のカトリック信者の多くにとっては、社会学者アルヴァックス (Maurice Halbwachs) のいう「集合的記憶 (mémoire collective) として、まさに彼らのコミュニティの「アイデンティティを形成するアクティブな過去」の役割を果たしているとも考えられよう<sup>3)</sup>。教会は祈りの場所としては無論のことだが、そうした「集合的記憶」を形成し、おりにふれて想起させる「記念碑」(monument) としても建設され、それ自体が聖地あるいは生活空間の「聖なる中心地」としての意味をもち続けているのである。そうした教会の意味は、1873年にキリシタン禁制の高札が撤去された後、ド・ロ (Marc Marie de Rotz) 神父、マルマン神父 (Joseph Ferdinand Marmand)、フレノー (Pierre Théodore Fraigneau) 神父らパリ外国宣教会の宣教師たちの指導によって建設された初期の教会はもとより、最近になって建設された鉄筋コンクリート作りのモダンな意匠の教会に至るまで継承されている。信者たちにとって、教会の宗教的意味の重さは建築年代の古さや建築物の芸術的価値とは直ちに同一ではなく、むしろ教会建築およびそれが建つ場所の

背景にある歴史・物語・集合的記憶の重さである。そして今日、教会巡礼などのかたちで教会群を訪れる人々の宗教的関心を惹きつけているのも、まさにそうした長崎のカトリック教会群がもつ物語とそれに保証された聖性にほかならないのである。

長崎県の観光の現況とキリシタン文化の再評価

次に、カトリック教会群が観光資源として注目され、さまざまなレベルでの観光戦略に組み込まれるようになった背景には、長崎県の観光が抱えるどのような問題点があったのかを考えてみたい。九州地域の観光は近年、日本の他の地域と比較して相対的に低下傾向にあることがつとに指摘されており、長崎県もその例外ではない。エキゾチックな魅力に溢れた街として全国的な知名度が抜群の長崎市と硫黄地獄で名高い雲仙温泉を中心に、高度経済成長期から1990年代まで長崎県の観光入込客数はおおむね順調に増加して、1996年にははじめて3,000万人を突破した。しかし、3,000万人の大台に乗ってからは伸び悩みをみせた観光入込客数は、2000年以降は一転して減少しはじめ、2004年にはついに3,000万人の大台を割り込んで2,913万人へと落ち込んでしまった。こうした長崎県の観光の低迷にはさまざまな要因が考えられるであろうが、交通網の整備による観光行動の日帰り化がそれに拍車をかけていたことは間違いないであろう。日帰り観光客の増加、宿泊観光者の減少という事態は、当然のことながら観光消費額にも反映することとなる。すなわち、観光入込客数がはじめて3,000万人の大台に乗った1996年の3,027億円をピークとして観光消費額は低迷し、2004年には2,535億円という1992年以前の水準に戻ってしまっているという状況なのである<sup>4)</sup>。

長崎県におけるこうした観光の低迷を検討するうえで看過できないのが、観光客層およびその観光目的の変化である。かつて長崎は「鎖国時代に唯一開かれていた海外への窓口」であり、

中国とオランダの文化が混在して今も息づく「ちゃんぼん文化」の港町として歴史教育の格好の教材となり、あるいはまた広島に続いて原子爆弾の惨禍に遭いながら奇跡的な復興を遂げた街として平和教育にとってもかけがえのない教材となることから、多くの学校の修学旅行先として選択されていた。九州のみならず西日本各地や遠くは首都圏からも訪れる修学旅行生は長崎観光にとって重要な顧客であり、1989年の時点では長崎県全体で94万7千人の修学旅行者を集めていたのである。しかしながら、修学旅行そのものの目的が変化し、それに対応して選択される旅行先も海外を含めて多様化する傾向があること、さらには修学旅行そのものを廃止する学校も増加してきていることなどから、近年では長崎県を訪れる修学旅行者数は急激な減少を続けており、2004年にはついに43万9千人と89年の数値の半分以下にまで落ち込んでいる。宿泊観光客数の減少を考えるうえで、修学旅行生の激減という事態が大きな要因となっていることは言うまでもない。こうした状況を打開すべく、長崎県観光連盟が主体となって「ながさき修学旅行ナビ」というホームページを開設してさまざまな情報発信や教材提供に努めているが、今後も長崎を訪れる修学旅行生数の見通しは厳しいと言わざるを得ない<sup>5)</sup>。そして、このような修学旅行生の減少という事態が端的に示しているように、かつてのマスツーリズム的な観光の対象としての長崎は限界に来ており、今後いかなる観光地を目指していくのを見直すべき岐路に立たされていることは間違いないのである。

修学旅行生に代表されるマスツーリズム的な観光の行き詰まりという事態とも連動して、長崎県を訪れる観光客層にもまた少なからぬ変化が生じている。観光客の旅行目的が年代や性別によって差異を示すことは当然であり、たとえば長崎観光でも多数を占める40代・30代以下の中年・若年層では「名物料理」や「遊園地・テーマパーク」などが最も多く選択される傾向

にある。しかし、近年の長崎観光では50代、60代以上のいわゆる中高齢者の割合が増加しており、しかもそうした年齢層の観光客の多くは旅行目的として「名所旧跡をみること」や「自然風景をみること」を挙げる傾向を示しているのである。これはマスツーリズムからそれへの批判としての個性的なオールタナティブ・ツーリズムへという観光形態の変化とも呼応しており、時間的にも経済的にも余裕のある中高年層が、「名所旧跡」を手がかりにして歴史文化を体験することや、ゆっくりと「自然風景」を楽しむことを目的とするようになってきていると言えよう。また、若年層でも歴史文化に対する関心が低いとは言えず、むしろ自分の興味関心にあった個性的な旅行への志向性が高まりつつあることを踏まえるならば、長崎観光の戦略的なポイントは長崎固有の歴史文化をいかに掘り起こし、発信していくかということに存するのである<sup>6)</sup>。

一方、造船がかつてのような盛況を取り戻せていない現在の長崎県の基幹産業は農業と水産業であるが、長崎県の産業全体は低迷を続けており、雇用もないことから若年層を中心とする人口流出と過疎化が進行している。したがって、観光業の活性化による地域振興を進め、若年層をはじめ社会各層の雇用を確保することは県全体として取り組むべき急務となっており、実際にそうした認識のもとに長崎県は「観光立県」をうたって効果的な施策を探っているところである。そして、実効性ある観光振興を模索していくなかで、観光協会をはじめ長崎県各地域の観光関連部局としては、「使えるものは何でも使う」という基本的なスタンスをとっている。そうしたなかで、先に指摘したような観光客層および旅行目的の多様化という事態に対応するため、何を長崎固有の観光資源として売り出せばよいかを検討されるようになった。日本各地の地域振興において一つの大きな潮流となっている「地域文化」の掘り起こしと再評価に呼応するかたちで、長崎固有の魅力的な地域

文化が求められたのである。そして、長崎固有の歴史文化の再発見・再評価に関する動きを代表するものとしては、長崎県の教育委員会と観光課とが共同して進めている「ながさき歴史発見・発信プロジェクト」を挙げることができよう。長崎県長期総合計画における後期5カ年計画のうちの重点プロジェクトの一つである「文化を活かした地域活力創出プロジェクト」としてはじめられたこのプロジェクトでは、長崎県の特徴である歴史テーマを取り上げ、それに関わる「地域ストーリー」を描き出すことによって長崎県という場所の魅力を高め、ひいては観光振興につなげていこうとする試みである。そして、長崎固有の歴史テーマの一つとして、最初に取り上げられることとなったのが「キリシタン文化」だったのである<sup>7)</sup>。

「ながさき歴史発見・発信プロジェクト」に集約されるような、近年における一連の「キリシタン文化」再評価の一環として、カトリック教会群が脚光を浴びようになってきたとあってよいであろう。先述したような歴史を背景に成立し、他のどの地域にもみられない貴重な文化資源となっている長崎の「キリシタン文化」を象徴するものとして、観光資源としてはむしろ古いアイテムであったとも言うべきカトリック教会群が再び注目されはじめるのである。そうした再評価の機運は県内各地の独自の歴史・文化のなかで検討され、各地域の観光戦略へと結びつけられていくことになる。たとえば、外海地方ではバスチアの伝承を核に、カトリック作家遠藤周作の作品と地域の景観とを結びつけることによって「キリシタンの原郷」と称すべきイメージ作りを行っている。さらにまた、ド・ロ神父による福祉・慈善事業や殖産事業を物語化して、キリスト教的なコミュニティのイメージをも重ね合わせることによって、教会群を訪れる旅行者の宗教的関心を惹きつけることに成功していると言ってよいであろう。また「寺院と教会が見える風景」を売り物としていた平戸では、観光協会が主体となっていち早く

「キリシタン紀行」という旅行商品を売り出し、教会巡礼ツアーというコンセプトの成立によって先駆的な企画を実現させてきた。そして、観光入込客数の減少に歯止めのかからない五島列島に目を移すならば、福江島を中心とする五島市においても、北部の中通島や若松島などから成る新上五島町においても、「祈りの島」というキャッチコピーと共に「教会めぐり」をアピールし、巡礼ルートの検討を行ったりしている。ことに新上五島町では、当地出身の写真家M氏が撮影した町内の29教会すべての写真を載せた「巡礼・スタンプ帳」が作成されて、絵葉書セットと共に各教会に置かれるようになったが、そのスタンプ帳にははっきりと「ロザリオロード」と称する「教会巡礼道」のルート・マップが示され、各教会には番号が付けられている。こうした企画が、教会の価値を知らしめようとする熱意に溢れた活動であると同時に、観光戦略の一つでもあることは間違いないことであろう。

#### 世界遺産運動の問題提起

教会をめぐるこうした再評価の動向に先駆的かつ決定的な影響を与えていると思われるのが、「長崎の教会群を世界遺産にする会」(以下、「世界遺産にする会」)の運動である。「世界遺産にする会」は2001年9月15日に当初メンバー15名で発足し、現在では県内外の各界有志80名がメンバーとして名を連ねている。この会はパンフレットに述べられているとおり、「長崎の教会群を世界遺産に登録することを目指す諸活動を行うため、専門家や教会関係者に限らないさまざまな分野の有志が自主的に」集まって結成されたものである<sup>8)</sup>。この会の本来的目標は、長崎のカトリック教会群の意味をその背景にある歴史・文化と共に広く世間に知らしめ、過疎化や高齢化などの諸事情によって地元住民だけでは維持が困難になってきている教会建築を永く保存していくことに存する。そうした観点からこの会では、教会の価値を「歴史的な価

値」「建造物としての価値」「文化的景観としての価値」の三点に集約して捉え、それらを総合的にとりまとめることによって、ユネスコが設定している世界遺産登録基準をクリアすることを目指しているのである。このうち「歴史的価値」とは、約450年にも及ぶ「キリスト教の伝来・弾圧・復帰の歴史」の唯一性であり、これを世界史的にも稀な出来事として理解することは、先にも指摘したとおり長崎の教会群をめぐる最も重要な物語となっている。また「建築物としての価値」とは、パリ外国人宣教会の宣教師たちによってもたらされた西洋の建築技法と日本古来の大工・左官・石組み等の技術とが結びつき、「東西の文化が融合した結果」として教会が存在するという考え方である。それを象徴する人物として、五島出身の建築家である鉄川与助(1879~1976)の名が挙げられるが、現在では彼の手になる教会の多くが国や県の文化財に指定されている。そして、「文化的景観としての価値」とは、潜伏時代から信者たちの生活が連続と引き継がれてきた生活の場としての「教会を取り巻く環境」を再評価し、「生活の中に息づく教会」としての価値を強調しようとするものである。

これら三点の価値を広く各界の人々に認識させることによって「世界遺産」への道を切り拓こうとするこの会は、決して教会を過去の遺物として文化財化することを企図するものではない。むしろ逆に、長崎の教会群を「生きた教会」としてのありのままの姿の内に再発見し、その固有の価値を失わせないようにすることを狙いとしている。たとえば、この会の実質的な発案者であり推進者でもあるカトリック信者のK氏は奈留島の「カクレキリシタン」の末裔として、亡父がオラショを唱えるのを聞いて育ったという経歴の持ち主であり、それだけにまた今のままでは教会とその背後にある歴史とが闇の彼方に永遠に消え去ってしまうことになるのではないかという強い危機意識に突き動かされて活動しているのである。「世界遺産にする会」の基本

的スタンスは、キリスト教信者であるなしに関わらず、教会の歴史・文化的な価値を認め、保存しようとする人々の学術的かつ自発的な啓蒙団体であることに存している。

それにもかかわらず、「世界遺産にする会」では当初から、教会や景観の保存と並んで、「観光との調和」が強調されてきた。すなわち、キリスト教信仰の有無に関わらず、そこを訪れる人々が「心のバランスを取り戻す空間」として教会を位置づけ、「外部からの交流人口に大きく門戸を開く」ことが明言されているのである。そして、教会とその周辺環境が「観光資源として地域活性化の起爆剤となる可能性」を認め、その可能性を現実に活かしていくことを積極的に容認している。「世界遺産にする会」の運動では、文化財として貴重な価値をもつ教会を、信者の生活の中心である「生きた教会」として保存しつつ、同時にまた「観光資源」として地域活性化のために活かすという、互いに矛盾対立するように思われる課題が同時に掲げられてきた。このことは「教会の保存」という趣旨が自治体の観光振興策や産業界の観光事業などと直結することを警戒しながらも、他方では現実に過疎化し経済的に低調な地域で「教会の保存」を実現していくためには、教会を観光資源とする地域活性化政策にも相乗りしていかなるを得ないというディレンマを示している。観光当局が「使えるものは何でも使う」と言うのと同様に、「世界遺産にする会」の側でも「教会の保存」を実現するために「使えるものは何でも使う」というのが実情である。そして実際に、この会の運動を通して教会群の知名度が上がれば上がるほど、離島のさらに僻遠の地に佇む小さな教会にさえ、多くの観光客が訪れるようになってきているのである。

「世界遺産にする会」が内包するこのようなディレンマは、現代においては教会が、あるいはおよそ宗教的な「聖地」というものがツーリズムと無関係ではいられないし、「観光のまなざし」(the tourist gaze)の対象にならずには

いられないのだということ、端的に示しているように思われる<sup>9)</sup>。「教会の保存」は地域活性化に依拠せざるを得ず、地域活性化の最も一般的（あるいは安易）な方策が観光振興であるという現実を踏まえるならば、教会保存の運動もツーリズムに依拠せざるを得ないのである。そうであるとするならば、教会およびそれが存立する聖地の歴史や聖なる物語を可能な限り観光客にも理解させ、聖地とツーリズムとを両立させていくという道も、自ずから選択されざるを得ないのである。「観光の世紀」と言われる現代において、社会のすべてを呑み込むと言っても過言ではないようなツーリズムの潮流と関わりながら、聖地がその「聖性」をいかにして保っていくかという問題が、ここにも立ち現われているように思われる。

#### ツーリズムと巡礼の共存

さて、以上述べてきたような長崎県のカトリック教会群巡礼とそれを世界遺産にしようとする運動、さらにはそれらすべてを巻き込んだ「教会巡礼ツアー」を売り出す観光戦略に代表されるようなツーリズムの動向などから、現代における聖地のあり方とツーリズムとの関係についてどのような問題性を読み取ることができるであろうか。ここでは V. スミスが観光研究の枠組みとして提示した、旅行（観光）をする側としてのゲスト（guest）とそうした旅行者（観光客）を受け入れる側としてのホスト（host）という二つの視点からそれぞれの問題を考察してみたい<sup>10)</sup>。

まず、ツーリズムを受け入れるホスト側に関しては、教会を中心とする信者たちによるコミュニティの間で以前に比べて、自分たちの教会の意義と歴史が強く意識されるようになってきたと言うことができよう。ツーリズムと向き合うことによって聖地の歴史・物語が再認識され、自分たちの先祖と出自をめぐる「集合的記憶」が喚起させられるという現象が、さまざまところで生じているように思われる。また、

キリスト教信者でない人々の間でも、郷土の教会とそれをめぐる固有の歴史・文化に対する関心が高まり、各種メディアがそうした情報を活発に伝えるという現象がみられる。こうした関心の高まりによって、かつて長崎県教育委員会が『長崎県のカトリック教会』という報告書をまとめてその価値を訴えたにもかかわらず、その後、幾つかの古く貴重な教会が倒壊してしまったという悲劇的な状況は、少なくとも何らかのかたちで回避され得ようになっていると言うことができよう<sup>11)</sup>。

また厳密な意味でのホストに当たる信者や教会関係者に関してはどうであろうか。本稿がもとづく共同研究による聞き取り調査をした範囲では、地元の信者は観光客のマナーの悪さや観光客に対するホスピタリティの負担の大きさに辟易しながらも、概して多くの観光客が自分たちの教会を訪れることについては好意的であるし、「世界遺産にする会」の運動に対しても共感的であるように思われる。ただし、地域のキリスト教信者と非信者（カクレキリシタンと呼ばれる人々を含む）との間ではもとより、信者同士の間でもかつての厳しい差別・被差別の記憶は根強く残っており、それが教会をめぐる観光政策への心理的距離感に反映している点もうかがうことができる。しかし、それにも増して内部における意見の対立がはっきりと見られるのは、聖職者の間においてであろう。「開かれた教会」としてどのような旅行者であれ、教会を訪れる人々に対しては門戸を開くべきだとして、「世界遺産にする会」の運動にも積極的に関与する聖職者がいる一方で、教会が観光化・観光資源化してしまうことに対する嫌悪感を明確に示し、「世界遺産にする会」に対しても否定的な聖職者も多い。

とは言い、カトリック長崎大司教区の監修による『長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド』という書物が一般読者向けに一般書店で発売されている状況をみれば、ホスト側としての教会は総じて「聖地のマスツーリズム化」という現

実を積極的に見据え、それに対応しようとしているようにも思われる<sup>12)</sup>。聖地としての教会に「マストゥリズム的なまなざし」が向けられ、ツーリズムに関わる聖地のマネジメントが必要とされる状況に対する宗教の側の態度として、このことは注目に値するであろう。ツーリズムの側が用意する簡便なガイドブックは、聖地という空間が本来的にもっていた多様な曖昧さを切り捨て、そこを訪れる人々が実感したいと考えている聖地としての特徴（たとえば「世界遺産にする会」の運動やメディアが発信する価値）を明示的に示すように工夫されており、聖地を管理する宗教の側でもそれに即して自らを提示する仕方を変えていくのである。さらに言えば、教会関係者や地元住民も含めて、自分たちの教会と歴史とについて、「見られること」「見せること」を主体的に引き受けることによって、自分たちの生き方や信仰、あるいは教会を中心とする地域文化が「外部の人々にどのように映っているのか」を真剣に問い直さざるを得なくなっているとも考えられるのである<sup>13)</sup>。

一方、教会を訪れるゲストとしての観光客に関しては、「教会巡礼ツアー」や個人による教会探訪旅行の増加という状況を通してどのようなことが考えられるのであろうか。「教会巡礼ツアー」に参加している観光客は、宗教的な巡礼者だと考えられるのであろうか。スミスによれば、観光客とは一般的には、「一時的な余暇のうちであり、何らかの変化を経験するために家庭を離れた場所を自発的に訪問する者」のことである<sup>14)</sup>。この「何らかの変化」を経験する契機として現代社会においてはさまざまなものが想定され得るが、スミスは日常生活から非日常的な時間・空間への移動というツーリズムの構造そのものには宗教的巡礼との類似性を認めている。そして、ツーリズムとの類似性・親近性に関しては、巡礼研究の泰斗である人類学者V. ターナーの「巡礼者が半ば観光客であるならば、観光客も半ば巡礼者である」という見解をはじめとして、数多くの言及がなされている<sup>15)</sup>。た

例えば、N. グラバーンは、儀礼に関するE. リーチの図式を援用して、現代社会においては観光が伝統的社会における儀礼の役割を担っており、「聖/非日常的/ツーリズム」と「俗/仕事/在宅」という二つの生活が習慣的に反復されることによって「聖なる時間」が創出されると述べ、ツーリズムそのものを「聖なる旅」と呼ぶ<sup>16)</sup>。またD. マッカネルは、ツーリズムの対象は「擬似イベント (pseudo-events)」に過ぎないとするD. ブースティンの見解に反論して、観光客のうちに「真正性 (authenticity)」の追求という本物志向があることを指摘したうえで、そうした志向性は「聖なるものに対する人間の普遍的な関心の現代的な現われ」であると主張し、さらにはツーリズムを「自分の日常生活から離れた別の 時間 や別の 場所 における現代的な一種の巡礼」と位置づける<sup>17)</sup>。

とは言え、観光客の経験と巡礼者の経験との間に構造上の類似性を見出そうとするこのような見解に対しては、当然のことながら批判も多い。たとえば、観光人類学者の橋本和也は、巡礼からツーリズムへという歴史的連続性を認めながらも、ツーリズムと巡礼とは本来別の文脈に属するとして、ツーリズムの特徴は「ほんの少しの、一時的な楽しみ」を「消費する」ことにあると主張する<sup>18)</sup>。確かに、ツーリズムの本質が消費に存するのに対して、巡礼の本質は宗教的動機であるとするならば、巡礼とツーリズムとをただちに同一視することは、聖地観光をめぐる複雑な現実の説明にはならないであろう。長崎のカトリック教会群を訪れる観光客にしても、そのすべてが「聖地を巡礼する」という明確な目的を有している訳ではないし、ましてや「聖なるもの」の体験を欲しているという訳でもないであろうからである。「教会巡礼ツアー」に関して、単純に美しい教会建築や景観を見物することや、ツアーにつきものの美食や温泉を楽しむことが、主要な旅行動機になっている場合が多いという事実は否定できない。

しかしながら、そうした点で大きな留保をつけながらも同時にまた、教会を訪れる観光客のなかに、本物の聖地に対する真摯な関心と憧憬とが見出されることもまた確かである。「観光客は同時に巡礼者である」とはただちに言うことができないにしても、冒頭にスミスの指摘を示したようにマスツーリズムが発達した今日では、巡礼者と観光客とは共に旅行者としては「同じインフラを共有」していることは紛れもない事実である。そうであるとすれば、「巡礼者は同時に観光客である」という事態は現実に存在しているし、逆にまた観光客のなかに巡礼者のような宗教的関心を見出すこともまた可能であろう。グラパーンも指摘するように、「聖なるもの」の個別化・個人化が進行している時代であるからこそ、ツーリズムというかたちでの「聖なるもの」との出会いもあり得るのではないであろうか。E. コーエンは観光客の経験を「休養モード」「気晴らしモード」「経験モード」「実験モード」「実存モード」の5つに類型化し、ある種のツーリズムには「自分探し」や「スピリチュアル（霊的）な探求」の要素、あるいはまた巡礼の要素がみられることを指摘している<sup>19)</sup>。少なくとも現代社会におけるツーリズムの影響力の大きさを考慮するならば、巡礼とツーリズムとをそれほど簡単に峻別し得るか否かについては、十分に議論の余地がある。

長崎のカトリック教会群に関して言えば、多種多様に存在する観光対象のなかから、あえて離島の教会群を目的地として選択する人々には、それを選択するだけの動機・関心があることは間違いないであろう。そうした動機・関心を、教会に「癒し」や「安らぎ」を求めようとする人々の心の問題、あるいは端的に「スピリチュアルな要求」と呼んでも、さほど見当違いのこととは思われない。近年では、日本国内のカトリック信者だけではなく、韓国やイギリスなど諸外国のキリスト教徒が NAGASAKI という地名の宗教的意味に導かれて、長崎県の教会群や殉教地を訪ねるといった事例も増加してい

るという。そこには宗教的動機が明瞭に見て取れるであろうが、さりとてそうしたキリスト教徒たちの旅行がまったくツーリズムでないとも言い切れない。逆にまた、キリスト教徒でなくとも、たまたま観光パンフレットで知った「教会巡礼ツアー」に参加する中高年の観光客や、休暇を利用して一人教会巡りを楽しむ若者たちが、まったくスピリチュアルな要求をもたない歓楽追求者に過ぎないとも言い切れないであろう。ステンドグラスを通して射し込む夕陽の光を浴びながら一人瞑想に耽る旅人が、果たして巡礼者であるのか観光客であるのかの判断を、表面的な事象からのみにわかに下すことは困難である。

「聖なるもの」が見えにくくなっている現代社会において、たとえそれが観光戦略として売り出されたものであっても、長崎の教会群とそれに関して語られる歴史・物語への宗教的関心が、長崎を訪れる多くの人々にとって観光行動の契機となっているのである。美食と温泉を堪能することがツアーのなかに含まれ、「物語られているとおりのもの」を見たい、テレビや写真集などで「よく知られた貴重な教会」を見たいという願望があるにせよ、それをもって観光行動の形態に隠された宗教的関心を看過することはできないであろう。プーアスティンが指摘するように、「観光客の欲求は、その人自身の頭のなかにあるイメージが確かめられたときに最もよく満たされる」という面は確かにあるであろう<sup>20)</sup>。しかしそこには、あるいは聖地を「聖地として信仰する」という自覚的な思いではなくとも、「聖地とはどのようなものかを体験してみたい」という一般的なかたちでの、とは言え人間としての根源的な関心が存するとも考えられる。中谷哲弥は、聖地という「記号の複合体」がツーリズムと巡礼という「複数のまなざしを引き受けること」で、マスツーリズムとの親和性を高めてきたことを指摘しているが、そのときそうした「複数のまなざし」が果たして背反的なものでしかないのか否かが

問題となる<sup>21)</sup>。現実にはむしろ、巡礼とツーリズムとが共存し得ることを示しており、むしろこれからの大きな課題はそれらのよりよき共存の可能性を考えていくことではないかと思われる。

#### むすびにかえて

かつて聖地巡礼は困難な旅の代名詞であり、困難であるからこそ人々を惹きつけもしたし、巡礼を成し遂げることが尊ばれもした。しかし、現代社会においては、聖地に関する人々の知識やそこに至るまでの道のりについての知識が豊富になり、多少僻遠の地であっても安全で快適に聖地を訪れることができるようになった<sup>22)</sup>。観光戦略によって聖地に関する知識が先行し、それによって現代人がツーリズムというかたちで聖地への旅に誘われるということは、きわめて現代的な現象の一つであろう。長崎のカトリック教会群に関しては、「世界遺産にする会」の運動やそれに触発されたさまざまなレベルでの情報の発信が、人々を西海の聖地・教会群へと導く要因となっているとすることができる。しかし、それを聖地の「聖性喪失」あるいは「墮落」と決めつけてしまうのではなく、ツーリズムと聖地との共存の問題として考えることには、ツーリズム研究にとっては言うまでもなく、宗教研究にとっても大きな意義が見出されるように思われる。そして聖地がもっている固有の歴史・物語・価値が、人々のうちにある聖なるものへの関心、あるいはスピリチュアルなものへの潜在的な要求をツーリズムというかたちで引き出し、それに対してまた聖地の側が応答するという現代的な現象を考察するうえで、長崎のカトリック教会群とそれをめぐる巡礼ツアーの問題は貴重な事例を提供するものと思われるのである。

#### 追記

本稿は、国際観光学科共同研究「長崎におけるキリシタン教会群の今日的意味の研究と政策

提案」(片岡力、木村勝彦、細田亜津子)およびそれに続く「長崎キリシタン教会群に係わる広域圏教会群の歴史的基礎研究」(片岡力、木村勝彦、細田亜津子)による研究成果の一部である。

#### 注

- 1) Smith, V. (1977) Introduction: the Quest in Guest, *Annals of Tourism Research* 1(1), p. 2.
- 2) ここに挙げたカトリック信者数は、各小教区ごとの「信徒籍台帳」に記載された信者数に、聖職者、修道者、神学生の数を加えたものであり、長崎大司教区のまとめた資料に基づいている。
- 3) 集合的記憶は、デュルケム (Émile Durkheim) の集合的沸騰 (effervescence collective) などと並んで、社会学における基本的な概念の一つとなっている。提唱者であるアルヴァックスが自身の研究構想を完成させることなく他界したため、さまざまな研究者によって継承・補完されて、影響力のある学説となっている。集合的記憶に関するアルヴァックスの議論の要点は、(1)記憶は社会的に保持される、(2)記憶は空間的・物質的に保持される、という点に存するが、特にそうした集団の記憶が保持されるために永続的な石造物が大きく貢献することを指摘していることは、長崎県における教会の意味を考察するうえでも参考となるであろう。Halbwachs, M. (1950; 1997) *La Mémoire collective*, Albin Michel. 小関藤一郎訳, 1989, 『集合的記憶』行路社を参照。
- 4) ここに概要をまとめた長崎県の観光の動向については、長崎県地域振興部観光課 (2002) 『長崎県観光動向調査概要報告書』および長崎県 (2004) 『長崎県観光統計』の二つの資料に基づいている。
- 5) 長崎県観光連盟 (2006) 『ながさき修学旅行ナビ』のホームページのアドレスは以下の通りである。<http://www/ngs-kenkanren.com/syuryo/>
- 6) 長崎県地域振興部観光課 (2002) 『長崎県観光動向調査概要報告書』, 96頁。
- 7) 長崎県政策調整局政策企画課 (2005) 『ながさき夢・元気づくりプラン (長崎県長期総合計画後期5か年計画)』, 11~14頁。
- 8) 長崎の教会群を世界遺産にする会 (2001) 作成のパンフレットによる。そもそもこの会は、2000年に五島の奈留島で開催された建築修復学会を発足の契機としている。

- 9) Urry, J. (1990. 2nd. ed. 2002) *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*, Sage Publications. pp 1-2. なおアーリによれば、「観光のまなざし」は「社会的に構成され組織化される」ものであるから、ツーリズムにおける個人の認識には、それを取り巻く社会構造や時代背景が投影される。聖地を訪れる観光客のまなざしも、観光客や聖地そのものが置かれている社会状況や時代の問題性を反映するという視点は、聖地とツーリズムとの関係を考察するうえで有益であろう。
- 10) Smith, V. (ed.) (1977) *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*. University of Pennsylvania University.
- 11) 長崎県教育委員会 『長崎県文化財調査報告書第29集 長崎県のカトリック教会』参照。たとえば、福江島の立谷教会は台風被害で倒壊し、その後復元されることはなかったし、久賀島の細石流教会に至ってはそれを維持していた集落そのものが姿を消し、教会も朽ち果ててしまった。これに対して、外海の大野教会も同じように老朽化が進み、倒壊の危険があったが、ここに述べているような一連のキリシタン文化復興の動きのなかで文化財としての貴重さが認められ、見事に修復されている。
- 12) 長崎文献社編・カトリック長崎大司教区監修 (2005) 『長崎遊学 2 長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド』参照。
- 13) 葛野浩昭 (1998) 「観光振興と地域文化の再構成」長谷政弘編著 『観光振興論』ミネルヴァ書房、98頁。
- 14) Smith, V. *ibid.* p. 8.
- 15) Turner, V., Turner, E. (1978) *Image and Pilgrimage in Christian Culture: Anthropological Perspectives*. Columbia University Press. p. 20.
- 16) Graburn, N. (1977) 'The Tourists: The Sacred Journey.' in *Hosts and Guests*. pp. 21-31.
- 17) MacCannell, D. (1976) *The Tourists: A New Theory of the Leisure Class*, University of California. pp. 49 and pp. 109.
- 18) 橋本和也 (1999) 『観光人類学の戦略 文化の売り方・売られ方』世界思想社、12～13頁。
- 19) Cohen, E. (1979) 'A Phenomenology of Tourist Experiences.' in *The Sociology of Tourism: Theoretical and Empirical Investigations*. Routledge. pp. 90-111.
- 20) Boorstin, D. (1962) *The Image: or What Happened to the American Dream*. Antheneum. p. 30.
- 21) 中谷哲弥 (2004) 「宗教体験と観光 聖地におけるまなざしの交錯」進藤英樹・堀野正人編著 『「観光のまなざし」の転回 越境する観光学』春風社、200頁。
- 22) Fuller, C. J. (1992) *The Camphor Flame: Popular Hinduism and Society in India*. Princeton University Press. p. 205.